

古い町家を守る職人の技

論

—ひょうご—



姫路支社編集部長 松岡 健

姫路城の周辺、野里地区や船場地区を歩くと、古い町家がおちらこちらにあり、城を中心とした町の風情を感じることができる。姫路市内の郊外や播磨各地にも、町家や農家などの伝統的な民家がまだ数多く残っている。一部はカフェなどに活用され、地元の住民や観光客の人気を集める。

その姫路市で10月、民家の保存・再生に取り組む「作事組全国協議会」姫路・町家再生塾によるシンポジウムがあった。作事組は伝統建築に携わる職人の集団を指す。同協議会は全国の団体が集まり、2009年に設立された。

シンポは「めんめらのいそはえらが守る（わがまちの住文化は職人が守る）」と題し、各地の大工5人が伝統構法の魅力などについて意見を交わした。

司会役をした姫路在住の版画家岩田健三郎さんは「私たちは古い町家がなくなっていくのを目撃してきた」と切り出し、町家に未来はあるかと問い掛けた。それに対

し、京都の大工は「祖父母の代に住んでいた町家に、孫の世代が住む例が増えている。少し希望はある」と答え、伝統的な建築が昆直されているとの見方を示した。

印象に残ったのは「『町衆』を復活させたい」という岩田さんや梶山秀一郎・同協議会長の提言だった。かつては町衆が町並みを守ってきた歴史を踏まえ、岩田さんは「家を『買う』と言いが、家は本来『建てる』もの。町に住む人が職人と対話しながら暮らしていけたらいい」と呼び掛けた。

もう一つ、姫路市内の町家に住むため、改修を進めている夫妻が客席側から発言した言葉が心に響いた。「煙炉を四つ張らないと、おせち料理が作れないほど寒い。町家に住むなんて勘弁してほしいと思った」と妻は笑いを誘い「でも、少しずつその魅力や美しさを感じるようになった。今は住めることがうれしい」と話した。

主催した姫路・町家再生塾の塾長で建築家の山田克幸さんは「姫路では、伝統構法に関心を持つ若い大工もいる。彼らが仕事をする場があれば、職人の技は引き継がれていく」と指摘する。

木造建築は手入れしないと維持できない。町並みを守るには、建築そのものにとどまらず、職人技の継承にも関心が向けられるべきだろう。町家を見直す若い世代を巻き込めつつ、職人と市民（町衆）が顔を合わせ、町の在り方を語る機会がもっとあればいい。